

武家名目抄稿

軍陣部九二一十六

和	二五二〇六	類
書	一〇七	函
門	一〇	架
	四五六	冊

內閣文庫	和書
二五二〇六	類
四五六	冊
一〇七	函
一〇	架

內閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (434)
函號	153 275



武家名目抄稿第十六冊

軍陣部九之一 目錄

馬煙

矢叫

矢聲

矢懸

矢衾

横矢



後矢

筋違矢

火矢

防矢

込矢

ツルへ矢

返矢

流矢



流矢ノ矢廿蘇幕十六冊

武一ノ矢抄物卷十六冊

矢贈リ

馬牒ノ使へ矢ヲ射懸

運ノ矢

高運不運ノ矢

又夕矢

浮矢

流矢

矢面

矢庭

矢留

扇ヲ上テ矢留ヲ乞

盤木

新ヤ外天ノ植

延

天

武家名目抄稿第十六冊

軍陳部九之一

馬煙

太平記云任吉令大手大將山名伊豆守舎

第三河守原四郎太郎同四郎次郎同四郎

三郎ハ千餘騎ニテ只今馬烟ヲ攀テ進

タル

又云將軍上義詮心細ク都ヲ落テ桂川ヲ

打渡リ向明神ヲ南へ打過サセ給ントス  
ル処ニ物集女ノ前西岡ノ東西當テ馬煙  
影ニク立テ勢ノ多少ハ未見旗ニ三十流  
翻テ小松原ヨリ懸出タリ  
又云新田義貞其日ノ晚景ニ利根河ノ方  
ヨリ馬物具爽ニミヘタリケル兵二千餘  
騎計馬煙ヲ立テ馳来ル  
明德記云去程ニ大曾會島ニ罄ヘタル佐

佐木ノ沼部少輔高詮ニ條口ニ軍始テ時  
ノ聲馬煙晴天ヲカスメテヲヒタニシカ  
リケレハ云々

矢叫

平家物語云くほのい なち志んらう乃  
そのとより矢一いつくその後平家へ志  
さるをやりんとしひさかた一千人  
志んくく此みねをす志ん

くうよちとり井のちうあんたかまうれ  
あふあんさうひよはう井素く井まう  
やめれちうなまうはしゆつちうん  
りけはうちせの二千よくと記法く  
矢あはせしあんしち方うはとこま  
進平家のあまはかうしりれとやま  
あじのうえれちんもなうちうのあり  
局を隙となく三白程うをまう

ちま

長門本平家物語云

東政射  
化鳥糸

化鳥かしの音

音はれちうきてよしあうしんあうち  
うらとあひさうちうりまはとこまう二志  
矢よあかあうあうつひちまきふひん  
ましあまうひやうとあうひらつとま  
いきりてれしちうまのまうてれほ  
へうれをえうりけふと矢まひまう太止

天白王御かん此の御衣をいかに  
つけざとちとす

太平記云 六波羅 主上上皇ヲ始進テ女院

皇后北政所月卿雲客見女童女房達ニ至

ルマテ軍ト云事ハ未目ニモ見給ヌ丁ナ

レハ時ノ聲矢叫ノ音ニ懼ヲノミカセ給

テコハ如何スヘキト消入計ノ御氣色ナ

レハ云々

又云 山門 山王大師ノ御加護ヤ有クニ俄

ニ朝霧深立隠メ咫尺ノ内ヲモミ又程ナ

リケレハ前陣ニ作ル御方ノ時ノ音ヲ敵

ノ防ク矢叫ノ聲ソト聞誤テ後陣ノ大勢

ツミカ子ハワキ口ニ時ヲソ移ニケル

又云 笠置 追手搦手城ノ中ヲメキ叫テ責

戦フ箭叫ノ音時ノ聲且モ休時ナケレハ

大山モ崩テ海ニ入坤軸モ折テ忽地ニ沈

ム欲トソ覺

明德記云去程二條大宮ヨリ軍始テ馬ノ

足音矢叫ノ聲天地モ響渡リケリ

箕輪軍記云箕輪城安中松井田落城條松井田安中西

城ノ軍兵一ツニナリ惣城都合一万五千

人ニテ箕輪ノ城ヲ圍南ハ日波ノ樓林

丁ノ森東ハ保渡田中ノ郷、成出ノ村

小鳥井出ノ郷西ハ高濱白岩愛宕ノ原北

ハ阿曾山相馬ノ嶽舟方山桃井カ原野尾

カ嶽山ニテナリカラ鯨波矢叫ノ聲百千

万ノ雷電ノ如クナリ

矢聲

愚耳旧聽記云南部勢浅村上瀬石寄糸理右衛門モ女房

モ大炊助ニサシツミキキリ立突夕テ矢

聲ヲアケテ戰ケル

矢懸



太平記云山門寄手誠ニ大勢ナリト云

敵ノ勢ニ機ヲ被吞テ矢懸マテモ進ミエ

ス大津唐崎志賀ノ里三百餘箇所ニ陣ヲ

取テ遠攻ニコリシタリケレ

又云山名伊豆守落美作城條山名伊豆守時氏子息中

務少輔三千余騎ニテ押寄セ城ノ四方ノ

山々峯々二十三ヶ所ニ陣ヲ取テ鹿垣ヲ

二重三重ニ結ヒ廻レ逆水ニケク引懸テ

矢懸リ近クソ攻タリケル

播州佐用軍記云上月城ヲ捕圍附矢懸リ

テハ不寄ハシ口ヨリ鉄ホウ一モ不打

鳴テ鎮テ居タリケル

松隣夜話云永禄五年二月十三日山ノ根

ノ合戦坂東諸將敵味方是ヲ見聞者凡關

關ヨリ以来是程仕ヲホフセタル軍ヲ未

聞武田北條兩名將殊殘五四万余ノ大軍ニテ

扣へ玉フノ処ニ大河ヲ越シ押通老功ノ  
勇士二千余リニテ持タル嶮難ノ要害ヲ  
僅一万計リニテ羊日ニ衆取リ二度武田  
北條ノ矢懸リ迫ク押返リ無恙飯陣有ル  
更ニ凡夫ノ態ニ非ス

矢衾

源平盛衰記云<sup>十三</sup>宇治合明禪ハ脇力キタル  
褐ノ帷ニ白大口ニ洗皮ノ腹巻ニ射向ノ

袖ヲソ付タリケルヲノミ長刀ワキキニ  
ハサミテニコロヲカタムケテ又行ケタ  
ヲ渡ケルヲ平家ノ軍兵矢フスマヲ作テ  
イケレハイスクメラレテ渡エサリケル  
ニ長刀ヲフリ上テ水車ヲマワシテ雨ノ  
フル如ニイケレトモ長刀ニタカレテ  
矢四方ニチルカコトクナリ敵モ御方モ  
與興ニ入テホメヌ者コソナカリケレ

鴨嶋物語云野伏を走去て馬武者をうり  
へあつらひらむきひうはをくり敵小強  
もあつらひ城河は歩きそり海りて矢を  
そつとせしむも六借きを以て野伏乃  
能とす

内外両宮兵乱記云去程ニ浦田口ヲハ山  
田三方衆入替々々攻戦ト云凡構堅ノ破  
ルニ氣色ナク矢。袋ヲ作リテ散々ニ射出

ケル間如何セント飽満シ所ニ牛谷陽田  
建国寺山杯ノ手明ノ在所ヨリ足輕凡走  
入テ所ニニ火ヲ掛シカハ宇治衆後ヨリ  
焼ルヲミテ木戸口ノ衆仰天シ取物モ不  
取敢落玉ヲ云々

小笠原入道宗茂記云矢。始。す。ま。を。は。り。て  
と。し。事。き。く。ぬ。事。也

鹿島治乱記云義幹卒手勢夜中渡海未明

押寄テ関ヲ揚ケ皮此ニト下リ立案内  
ハ知門脇ノ堀ヲ衆門ヲ開ト下知スル処  
ヲ待設タル兵凡矢サマ櫓ノ上ヨリ矢佛  
作り散々ニ射ル

横矢

異本義經記云 范頼義經一谷  
一向もろく糸 抑然一谷と  
尸を小者原山峨々と巖一峯はあろろ小  
るく志く屏風を立一うとく也 苗は巨

海融くとくく 穢打波の音さく陸うは堀  
を堀切く山より海北遠海と大石を望み  
上大木切く逆苔木小引城うは櫓のき並  
へ四國渡西の兵共射手をそろくく集ま海  
まを数千艘の舟を浮かの楯のきり射手を  
至極矢を射んと支度をたす

太平記云 三井寺合戦條 僅ニ羊町ニモ夕ラヌ細

道ヲ只一順ニ前マントスレハ和尔堅田

ノ者共カ渚ニ舟ヲ漕並テ射ケル横矢ニ  
被防テ懸引自在ニモ無リケリ

又云<sup>三才</sup>山門西国北國東海道ノ舟軍ニ馴夕

ル兵共ト覺テ畧漕双ヘタル船ニ射手ト

覺ヘタル兵數万人搔楯ノ陰ニ弓杖ヲ突

テ横矢ヲ射ント構ヘタリ

又云<sup>廿六才</sup>唐崎濱快實屹ト振及テ是ヲ見ニ齡

二八計ナル小兒ノ大眉ニ鉄漿黒也是程

ノ小兒ヲ討留タラシハ法師ノ身ニ取テ

ハ情ナシ畧組止メントシケル処ヲ比叡

辻ノ者共カ田ノ畔ニ立渡テ射ケル横矢

ニ此兒冑板ヲツト被射抜テ矢場ニ伏テ

死ニケリ

又云<sup>稻村崎成</sup>于瀉奈明行月ニ敵ノ陣ヲ見給ヘ

ハ北ハ切通マテ山高ク路險キニ木戸ヲ

誘ヘ垣楯ヲ搔テ數万ノ兵陣ヲ双ヘテ並

居タリ南ハ稻村崎ニテ沙頭路狭キニ浪  
打涯マテ逆木ヲ繁ク引掛テ澳四五町カ  
程ニ大船共ヲ並ヘテ矢倉ヲカキテ横矢  
ニ射サセント構タリ  
信長記云長島合戦大田河ヲ上リニ長島近  
邊ノ海賊共早船ヲ五六十艘推立螺鐘ヲ  
鳴シ弓鉄炮ヲ横矢ニ射カケ打懸喚ク聲  
聲中ク云ン方ナクソ覺ヘタル

紀州登向記云二十一日未刻御動坐也見  
合御旗先諸口一度寄人數一揆之要害敵  
自安道筋成横矢構ニ之前築土堤切挾間  
大筒小筒込藥大兵小兵解矢手把為待懸  
大友興廢記云久留米合戦赤坂六多洲萩尾  
大學全洲尉様矢を入跡取とりまはせは  
き又引け先傳一面ニ鎧此さきをなす  
突くはれは先傳の先陣後陣のものを

那〜一或ハ海<sup>采</sup>岸<sup>配</sup>ヨク志々々ハあまひはさひ

付犯馬路進ニテラ進敗軍を

<sup>三ニウ</sup>天口祀云 紀州路 祭向条 山每手の偽二十三

以上十四万騎の人數キ〜此〜表〜

ありふ畧廿一日未の別は勅生は旗先を

ニあ〜せと後口一度小人數を〜せ一撥

の要害は敵つき〜又横矢の如き〜

を〜あ〜と〜を法き〜海をきり云〜

<sup>五</sup>賀越闕諍記云 畠田弥六退 長俊使者ヲツ

カハレテ何トテ小林殿ハツレニ御入候

ツ構ヨリ内へ来リ候へト云小林聞テ左

候此所ニ在テ木戸ニ付ク敵ヲ横矢ニ射

候へレト申程ニ尤モト云ヒ又下ノ木戸

口ニハ小河黨其外衆合衆ナルカ故ニ無

覺束思テ駒引返ス

増補家忠日記云 天正九十二年味方ノ中ニ

毛魁ヲ争フ勇兵等十四五騎先鋒ノ輕卒  
ノ中ニ交リ居テ其隙ヲ窺ヒ進テ鎗ヲ合  
セント欲スルト云ハ斥敵夥敷競ヒ掛ル  
之間輕卒ニ押立ラレ覺ヌ少退ニ味方一  
同ニ鉄炮ヲ發メ横矢ニ射ル

後矢

平家物語云 火燧合 戦糸 平泉寺の長吏奇以威

儀師平家志好うりきぬ山徳根を

まもり消息を聞きしき目ふ入平家の陣  
つと射入るる名共是を石のち大將軍乃  
は前へ来りひひひひひひ此川と申老  
性古の洞あはれ一旦山川をせき留め水  
を渴しし人の心をたぢり夜み入て是  
煙世をまゝして志うこをきり流させられ  
あは水は程なく流し急き渡させ路  
つるの是立るき前より後う。ち矢をは



仕らんりう申者は平泉寺七吏育明威儀  
師の申状とを書しりき

長門平家物語云志雄軍系きふ原の元

中ふら申し我等五十余人源氏の臣方へ系

らんとし一うは實威一因と申れぬり

ふせたるを原んうひとてきりきりま

平家まけいさなれはとてさうせん乃

あうさすしきん一のはあしりまらぬ

さうあまに親みくらまんとすらうらともの

かきれ又さききく屋地せん何とあま

ん一もとれしをせんとし一とてさうて

んのあうさをすらうらとのふらう人とあま

ちきさうし一あうとらあれをとて心さう

ちきし一いれ又平家はしはう一ら知

ぬんまうやつ原ありうあふのとのよれんと

すらうらあまのらうらとりの世中かといん

山伏禪僧遁世

太平記云落山名伊豆守菊池カ家ノ子城越  
前守ハ謀アル者也ケレハ山伏禪僧遁世  
者ナントヲ忍ムニ松浦カ陣ニ遣メ其陣  
陣ノ人々ノ中ニタレカシハ御方ヘ内通  
ノ事アリ何カシハ後矢射テ降参スヘキ  
由ヲ申候ソ野心ノ者共ニ心ヲ置テ犬死  
シ給フナミント様ニニソ申遣レケル

又云建武二年正月將軍方大勢ナレハ被  
討共勢モスカス逃レリ共遠引セス只一  
所ニノミコラヘ居タリケル所ニ最初ニ  
紛レテ敵ニ交リタル一揆ノ勢共將軍ノ  
前後左右ニ中黒ノ旗ヲ差揚テ乱合テソ  
戦ヒケル何ヲ敵何ヲ味方共弁ヘ難ケレ  
ハ東西南北呼叫テ只同士打ヲスルヨリ  
外ノ事ソ無リケル將軍ヲ始奉リテ吉良

石堂高上杉ノ人々是ヲミテ御方ノ者共  
力敵トナリ合テ後矢ヲ射ルヨト被思ケ  
レハ心ヲ置合テ高上杉ノ人々ハ山崎ヲ  
サシテ引退キ將軍吉良石堂仁木細川ノ  
人々ハ丹波路ヘ向テ落給フ  
松隣夜話云思小幡長尾白倉氏康ト素ヨ  
リ内通セシモノ時節宜シト思ヒ譏忠ト  
諛ニ旗本ノ左右ニ相双ニテ後矢ヲ射ト

相謀ル

筋違矢

太平記云山門國々ノ兵共唐崎ノ一松ノ  
邊へ漕寄テサシ矢遠ス。ケカヒ。矢ニ矢種  
ヲ不惜射タリケル寄手大勢ナリトイヘ  
共山ト海ト横矢ニ射白マサレ田中白鳥  
ノ官軍ニ被懸立叶シトヤ思ヒケン又本  
陣へ引返ス

火矢

東遷基業云神君云を率ひ長祿城を臣略  
一孫ふ甲州より北寄将室賀一茶野小  
泉源三郎吉田某等方方を籠衣んゝ為り旗  
を偃せ鞆を以て人なきうとく志川まらう  
一川く有るなり加方方あや一にて火箭を  
多く射掛く事には折所一由風吹起り火勢  
甚熾となりて城郭をく灰燼とあり

防矢

<sup>四五七ウ</sup>平家物語云 高砂景日野十郎丸古兵衛有  
きまは石北陣を岩北をよほぬ一ま  
てかきあうり二人のこのともを引あけ  
助けきるとんきあへ一太物なつこい  
平等院の内内へせめつり戦ひたり此  
ほきれり字をはる都へ先達をまひせ  
三位の道の一獲渡旦堂三井るのち尻残

リとくまつとく階矢射り

ナニエオ  
又云 彦浦

判官進之藩之をくく此辺に平

家此らうらや射つ屋き仁を誰り者と宣

へは阿波民部重徳の弟樓間介能遠宅

ていとやすいさうらな蹴あしと通んとて

近者六ヶ幡百騎斗の中より馬や人とすく

川く三十騎のり踏ふとせ射らまはれ能

遠う城は押寄て之流へは三方に沼一言は堀

あり堀の方より射らまはれとて

作りらる内の名共多に射取まはれ

とくさしつめ引つめまはれ小射きまはれ

源氏の名共是を事とのせん甲北志らるを

うむむ堀をまへ喚き呼てせめりなれハ

能遠のあしと名思ひくむ家子郎等共小

好き死矢射させ我方を究竟のるを持し

至るまでなれまはれうらち集く希まはれ

くはたふきき

又云三、廿五判官都 大田右衛門頼基了の娘を後村を

せ力及もく引退く知り留まつく防矢村

りる云共廿餘人の既斬過させ軍神お祭

り関をとつと作り門せしと悦び進る

源平盛衰記云宇治合戦平家ノ兵共カク霞

ノ如クニ馳集テ河ノ東ノハタニヒカハ

テ時ヲ造ル一ニケ度ヲヒタシトモ斜

十ヲス宮ノ兵共モ時ノ音ヲ合テ橋爪ニ

打立テ禦矢射ケリ其中ニ寺法師ニ大矢

ノ秀定渡邊ノ清究竟ノ手タリナリケル

カ矢面ニスミミテサシツノミミミイ

ケルニソ楯モ鎧モ叶ハスメ多ノ者ハ被

討ケル

判官物語云吉野山合戦此のふえあれよそ

ありいふとよの大ーゆをもちえく一

まうれふせ化や仕りかゝる一まつあ

まうれせりやとりあれ

系久軍物語云志ゆくふ火をめくまぬあ

川たの四郎をぬき死やいろはくえんは

志ゆくくもんやをまぬきく時

しなうりたきしやく志ういせよ云々

太平記云神南令右衛門佐ハ小林民部丞

カ跡ニ踏止リテ防矢射ケルヲ討セシト

七騎ニテ又取テ返シ大勢ノ中へ懸入テ

云々

又云野大塔宮熊落城条既ニ中津川ノ峠越ントシ

給ケル所ニ向ノ山ノ峯ニ玉置カ勢トサ

トツテ五六百人カ程混曹ニ鎧ヲ楯ヲ前

ニ進メ射手ヲ左右へ分テ時ノ聲ヲソ揚

メリケル宮是ヲ御覧シテ玉顔殊ニ儼ニ

打突マセ給テ御手ノ者共ニ向テ矢種ノ

有ニスル程ハ防矢ヲ射ヨ心静ニ自害ノ  
名ヲ万代ニ可貽  
又云越後守仲時若跡ヨリ追懸奉ル事モ  
アラハ防矢仕レトテ佐々木判官時信ヲ  
ハ後陣ニ打セテ賊徒道ヲ塞ク事アラハ  
打散ノ道ヲ開ヨトテ糟谷三郎ニ先陣ヲ  
被打セ鸞輿跡ニ連テ番馬ノ峠ヲ越ニト  
ス

東乱記云鎌倉合戦寄手ハ大勢ナレハ追出

ハ荒手ヲ改責入ニ戦ケレハ築田河内

守同出羽守名塚左衛尉河津三郎ヲ初ト

シ防矢イケル人々一人不残討レニケリ

去程ニ方々ヨリ乱入人々ノ屋形ニ火ヲ

懸神社佛閣ニ入テ戸帳ヲ下シ神宝ヲ奪

合

義光物語云義光の旗トモ是より一里出



きに陣取給ひし留中にて是れ終る成ま  
し道より雜去れし手小なり終はんより爰に  
ては自害を成りし其内も我等共好む矢  
可仕とす所くあり水矢一洒すもく弓手此根  
日のあつふ立り

込矢

太平記云鷲坂午刻ノ始ヨリ酉ノ下マテ  
十七度マテソ戦タル夜ニ入ケレハ西方

人馬ヲ休メテ河ヲ隔テ篝火ヲ燒初ハ月  
雲ニ隠レテ夜モ深ケレハ義貞ノ方ヨリ  
究竟ノ射手ヲ勝テ藪ノ陰ヨリ敵近ク忍  
ヒ寄り後陣ニ罄タル勢ノ中へ雨ノ降如  
ク込矢ヲソ射タリケル  
應仁別記云金吾ノカタへ込矢射入ケル  
フタヒニナリ或時ノ矢ニ  
ウテナクハヤマヤ山名ノ赤入道手ツ

メニナリケレハ御所ヲ頼ヌ

大友真庵記云 宗麟公日向國  
江出陣の条 西月の末佐

伯宗天一門佐伯掃部助を使者ト日向

松尾土指岳城トきき掃部助出指

岳城トきき夜お操も薩めト掃

宅のトきき掃部助宿下ト矢

をききト北辺矢の子細を為ト亭之

にききトあるものききトの

立ち又ト一

ワルハ矢

判官物語云 征古大物  
合戦條 切トあつ志気きき

たれト志トの志気ひききトかふと

をききト中ト方ト七ト心トをトのトりトてトぬトな

阿トをトいトりトなりトあトきトまトあトすトもトりトさトけト

やト免トちトりト小ト形トやトとトのトらトれトとトあトりト

つトらトふトあトをトあトんトまトあトぬトあトいトまト志

ろ先〜てみならうとんとする物をたけけりて  
よ〜をいひやうふひやうときらぬを〜つる  
へやま〜くれりて〜

官地論云政親宜今日之合戦可為国之分  
濫不可懸楯一面突並勝手聞五人十人宛  
双箭可射一筋空矢不可射敵楯鼻閃有洗  
間射向袖宛額一同可截懸

返矢

舊事本紀云有國神天探女聞此雌鳴言而  
謂天稚彦言鳴聲惡鳥在此樹上可射殺之  
天稚彦持天神所賜弓矢便射其雉之時矢  
達雉胸逆射上逮坐天安河之河原天照太  
神高皇產靈尊御前矣高皇產靈尊取其矢  
見者矢羽着血即曰此矢者昔我賜天稚彦  
之矢也今何以故着血而也若國神相戰歟  
即示諸神等咒曰若以惡心射者天稚彦必

當遭害若以平心射者不中天稚彦即取其  
矢自空返下者其矢落下中天稚彦高胸而  
死矣世人所謂返矢者可畏是其緣也  
源平盛衰記云宇治合戰條足利又太郎真先力  
ケテ下知シケリ我等渡ストミルナラハ  
敵ハ矢フスマツクリテ射スラニ敵ハイ  
ストミ各返シ矢イニトテ河ノ中ニ返号  
引テヲシ流サレテワラハルナ

答ノ矢

奥州後三年記云お摸必の任人鎌倉の権五  
郎景山と云ふもの有り右の目を射せし首  
を射たりぬきしものもら付の板を射  
付られぬ矢を射りかけたるの矢を射  
敵を射りつ

<sup>廿五</sup>吾妻鏡云兼久三年六月六日己未今晚武  
藏太郎時氏陸奥六郎有時相具少輔判官

代佐房阿曾沼次郎親綱小鹿嶋橋左右衛  
門尉公成波多野次郎經朝善左衛門尉太  
郎康知安保刑部丞寶光等渡摩免戸官軍  
不及發矢敗走中武藏太郎到于筵田官軍  
卅許輩相構合戰具楯精兵射東士及數返  
武藏太郎令善右衛門太郎等射返之波多  
野五郎義重進先登之處矢石中右目心神  
雖違亂則射答矢云々

太平記云笠置軍條九月三日ノ卯刻ニ東西南  
北ノ寄手相近テ時ヲ作ル其聲百千ノ雷  
ノ鳴落カ如ニノ天地モ動ク計也時ノ聲  
三度揚テ矢合ノ流鏑ヲ射懸タルトモ城  
ノ中静リ還テ時ノ聲ヲモ不合當ノ矢ヲ  
モ射サリケリ

一ノ矢  
東迂基業云乙部藤吉解柳孫左衛門今村

傳四郎の本主水敗玄の中より弛返り  
乙部と云本は弓をくらり畔柳と今村を  
鉄砲を以て踏止る乙部一ッ矢を放遣し射  
換し多しあり傍あり逆原より武者五人  
進みより一団を鎗をとらして本を突く  
既よあやうく之らる所を云々  
矢贈り

<sup>五</sup>甲湯軍艦云矣。おくりと申て敵方の矢を

袖すり此ふしよりおうけもーり羽と一  
と地敵方へ返すあり敵方よりせき進む  
返答するに此なり是れ覺哉とつと  
る射手を不勉んつらた免也云々ハあき  
事也

牒ノ使へ矢ヲ射懸

<sup>廿五</sup>今昔物語云 源元平良 各軍ヲ調へテ戦ハ  
ム事ヲ嘗ム既ニ其契ノ日ニ成ヌレハ各

軍ヲ登シテ此ノ野ニ巳ノ時計ニ打  
立又各五六百人許ノ軍有り皆身ヲ弃命  
ヲ不顧シテ心ヲ励マズ間一町許ヲ隔テ  
楯ヲ突キ渡シタリ各兵ヲ出シテ牒ヲ通  
ハス其兵ノ返ル時ニ定レル莫ニテ箭ヲ  
射懸ケル也  
運ノ矢

甲陽軍鑑云永禄十三年庚午正月下旬小

駿州志保乃城一信云公方中の舎  
才武田道遠到信云公方意を以て諸手を  
見出せ成り同部次郎太助一見才在在家の  
上一道遠射才子強ひ立たし城甲を以強  
むる次郎太助一留戸を以才道遠射の  
はありたし一は運の矢とりおは道  
遠ぬとありしその戸を以才人押たし

ま

高運不運ノ矢

息和記云南とふもぬらん。の矢うらん。の  
矢とりもふもふもふもふもふもふもふも  
矢ハもふらん。の矢也又もつもつもつもつと矢  
つり也也もふもふもふもふもふもふもふも  
けて射る矢うらん。の矢也  
アタ矢

保元物語云抑為船中師よ廿四さーなる也ニ

あー十八さーなる矢三あー九さーなる矢一  
櫻射よりくろく義経のゆゑものほーいつつ  
たるとちものるつうひさ射るやニすーな  
ら〜はあ。矢一もるうらん

源平盛衰記云 宇治令 戦余 リ 三位入道ハ右ノ藤

ヲイサセタリケレトモ宮ノ御共ニ落行  
ケルカ子息ノ判官カ討ルミヲミテイツ  
クマテカ落行ヘキ禦矢ヲハ仕ルヘシ急



キ南都へ入セ玉ヒテ深ク衆徒ヲ御憑ア  
ルヘシ今コソ今生ノ最後ニ侍レサラハ  
イトマ玉ハルトテ引返シケレハ宮モ御  
遺リ惜ク思食シ御涙ニ咽ハセ玉フ入道  
ハ養由ヲモ嘲ル程ノ弓ノ上手年ハタケ  
タリトモ引取ニニ散クニ射ケレハ英矢  
一モナシ

<sup>苗ウ</sup>太平記云 隆資卿自八幡被寄余 惠源太此太刀ヲ給

テナトカ心ノ勇マサラン 中略 馬ヲハ群ク  
陰衆放三町余カ外ニ村立タル敵ヲサシ  
ツメ引ツメ散クニソイタリケル一矢ニ  
二人三人ヲハ射落セトモア。タ。ヤ。ハ。一。モ  
無リケレハ云々 人ハ物類ハ御出  
北條五代記云小田原に就城の時市子大守ハ志  
不<sub>レ</sub><sub>レ</sub>口<sub>レ</sub>の役不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>櫓一<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>教  
を目的トヨミテ鞍本大守既と矢志<sub>レ</sub>と

書付く放り矢ふ。矢を一つも  
新田老談記云桐生勢無程前千カク寄来  
ル左兵衛門外ニ乗出シ大音上ケ申ケル  
ハ寄来ル勢ハ桐生又次郎殿ノ御出馬ト  
覺テ候入道只今石原ヲ召連レテ八山へ  
退出イタシ何分ニモ前ニノ通御支配ヲ  
背申間鋪トノ支也某一家斗此所ニ残申  
御出馬ノ面々へ一矢ツミサヒタリ臣御

馳走申度候ト存ル也請テ見ヨトテ中指  
五十本右手左手ニ並置テ絃打シテハ一  
矢ニ矢ツミ心静ニ射テ出シケレハ寄来  
敵三百人斗集居タル支ナレハ徒矢ハ一  
筋モナカリケリ

東遷基業云引立ニテ安手再ひ返す事有  
く高橋平藏を始として武田先方乃甲  
物流信州流も到り湖邊より此流事有

國部長盛松平康成并天野必方丈小笠原  
越中波切孫三郎等踏止く岩——防ぎ戦  
ひる故り留中——そのへて中を引  
退く城も此とやあひあん何事貝越  
吹く本城より引死きれは奇手の息をひき  
負を助あしく産を包む方男村迄何心あり静  
引く押通る不意田り伏せたる榎井佐才足煙  
小下知——樹の蔭に藪の陰より銃炮を志きり

ふお城ろふあは——一つもなく奇手代士卒  
——と打倒せれば只ひ城なき事——  
始の戦ふ子惣を——ぬ又中交りも伏せ何ろ  
騎り有んと後病神よさせひ立られ一戦も  
ふ友人あき連つひふ敗小

浮矢

太平記云 山門 寄手已ニ堀ノ前マテカツ  
キ寄セ埋草ヲ以テ堀ヲウメ焼草ヲ積テ

流矢

櫓ヲ落サントシケル時三百余ヶ所ノ櫓  
土サマ出屏ノ内ヨリ雨ノ降如射出シケ  
ル矢更ニ浮矢一ツモ無リケレハ云々  
又云備中福山此彼ノ木隠<sup>陰</sup>ニ立<sup>隱</sup>レテ矢  
種ヲ不惜散々ニ射ケル間寄手稻麻ノ如  
ニ立双ヒタレハ浮矢ハ一モ無リケリ

舊事本紀云時長髓彦聞之曰天神子等所

以来者必將奪我國則盡起属兵邀於孔舎  
衛坂與之會戰有流矢<sup>イノヤグ</sup>中五瀬命肱脛皇師  
不能進戰

勝軍地藏記云<sup>神樂岡</sup>合戦糸松永團ヲ把テ高キ

処ニ上リ敵ハ小勢ナリ射凡突凡何ホト  
ノ夏カアルヘキカマハス推込カ射タリ  
ケル矢ヤラニ鳥井ノマヘニテ流矢来テ  
宮ノ御カタハラニ立タリケレハ云々

源平盛衰記云 教盛夢忠 去保元、年中ニ

新院讚岐國ニウツサレマシマシ左府流

矢ニ中リ玉ニ般若野ニ送り奉リタリケ

ルヲ信西カ計トシテ左府ノ御頭ヲホリ

ヲコシテ實換セラレ首ヲ山野ニステ

タテマツリ新院讚岐國ニテ五部大衆

經ヲ御書寫アリテ是ヲ都近キ所ニ奉納

セシト仰ケルヲ是モ信西カ計トノイレ

マイラセサリケレハ云々

太平記云 船上合 一方ノ寄手ナリケル佐

佐木彈正左衛門尉遙ノ麓ニヒカヘテ居

タリケルカ何方ヨリ射ルヒシラス流矢

ニ右ノ目ヲ射ヌカレテ矢庭ニ伏テ死ニ

ケリ

矢面

十五 平家物語云 嗣信最 越中次郎冬盛健上總

五郎之尉忠光悪七之尉源信を先づして  
百余人の船より小舟乗て焼拂くは西門の  
前此江り押寄く陣を以て判官も八十  
余騎を共馬の尻を一面より立てて大將軍  
の矢面小駟好きうりきまは力及たすも  
能く及ばずのきりて矢面の雜人原とてさし  
つめ引つめ散り小村移へは矢場も鎧武者  
十騎まくり村落を

源平盛衰記云 宇治合 平家ノ兵共カク霞  
ノ如クニ馳集テ河ノハタニヒカヘテ時  
ヲ造ルト三々度ヲヒタニシトモ斜ナラ  
ス宮ノ兵共モ時ノ音合テ橋爪ニ打立テ  
禦矢射ケリ其中ニ寺法師ニ大矢ノ秀定  
渡辺ノ清究竟ノ手タリナリケルカ矢面  
ニスミミテサシツメニニニイケルニ  
リ楯モ鎧モ叶ハス多ノ者ハ被誅ケル

又云熊谷父子寄 直實ハ小二郎ヲ矢前ニ

アテシト曹ノ袖ヲカサシテ立テ隠セハ

直家ハ父ヲ守ミテ前ニスミテ箭面ニ

立ツ武キ心ノ中ニモ親子ノ情ヲ哀レナ

ル

太平記云赤坂合 寄手大勢ナレハ思悔テ

楯ニハツレ矢面ニ進テ堀ノ中へ走リ下

テ切岸ヲ裏ラントスル処ヲ屏ノ中ヨリ

究竟ノ射手共鏃ヲ支テ思様ニ射ケル間

軍ノ度毎ニ手負死人五百人六百人不被

射出時ハ十カリケリ

矢庭

平家物語云頼立 嘉保二年三月二日美徳

守源義綱親臣當必頼立の庄をたをれあひ

よ山の久恒を圓應を殺害す見又うつて

日吉の社司延暦寺北寺官都合三十余人申

文を捧ぐ陣取一糸一糸と後二糸の関白  
辰大和原氏中務権少輔頼春小仰く是をぬ  
せうせらるゝ小頼喜北郎等矢を放や。六に  
射教さるゝとの八人座を蒙るゝとの十四人  
又云<sup>五十才</sup>橋台堂流の中より筒井淨妙以去ると  
一人背子の名もやわきと名も人この事あ  
りや見系せんとく廿四さつゝる矢を拵つめを  
よつめ教ふ射る矢。一應小教十人射る

十一人より負をたきは以服よへを射し  
應永記云城中ニ乱入ントテ命ヲ塵芥ヨ  
リモ輕クシテ切テ入ケルニ敵手痛ク禦  
戦フ間北畠少將ヲ始トメ矢庭ニ十余人  
討死ス

矢留

大友與庵記云<sup>岩の峰</sup>攻の條去る程より橋一旦  
勇進をとけやすところ也此うへはつうは



んの望を中あんと刻しひ矢。留と乞

又云 言表伊豫志願及擇よか務 伊豫志武  
不望も子たろく軍衆

夫若此上手あきは一と人はあますところ乃

勇氣ありせうくは降人とあり城を渡し

中破へきり一矢留を乞つひとてり

稲富其義は尤ありせうも志うろへく存

とて困をとひて引退く

武蔭叢語云秀吉公は意よ先年長久手合戦

之時中書<sup>本多</sup>僅五百余騎あり少も悔れ士卒下

知し秀吉旗下数万の陣にむと排うあ疾

炮足怪を搦しり法大將是を討めんと望し

其秀吉叔をん云々多々今彼う小務を以て

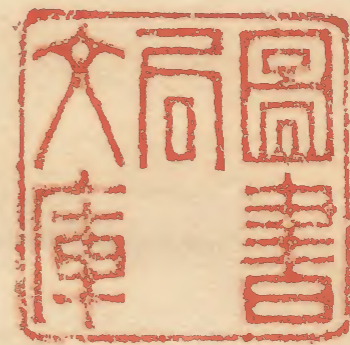
秀吉の軍に敵討せんや然るも並推りて

利と合戦をとり搦るは秀吉の道の手

写をみせ家康の合戦を仕旦きん為あり古

今の勇士志義の侍也今年八を討れとも秀





吉運極らはいさ由又負一たて入家康  
数万北曾士を指とも亦の吉リ運強くを軍に  
務人必し平八を旗炮より打るありれと  
矢と色と一也

扇ヲ上テ矢留ヲ乞

大友真廢祀云津久見四ヶ浦合戦条小舟一艘ナリき  
よせあふまを上る矢留をいひ嶋は家久の  
つひといふ所をり河三河と種島又あつ玉

を少免るる川使老とさいつととわをりれ舟  
底ホトつふ勢櫓りのをなき一ひんとす云々

武家名目抄稿第十六冊



明治十五年十二月 日 旧稿校正 小野由久  
 今年全月三日再校并書  
 青山景通  
 全月廿一日校乃加朱點乃成

明治十七年二月十七日 校正 青島英保

